

私は北海道の広尾町で生まれ、畑や自然に囲まれた環境で育ちました。中学校の部活期間は7kmの砂利道を自転車で通学しなくてはならず、体は鍛えられましたが大変苦労していました。そんな中、砂利道がアスファルト舗装に変わったことで苦労は半減し、社会資本整備の有難さが身をもって実感したことが思い出されます。

コツコツと物を作り上げる事が好きで、大学のゼミでは橋梁設計を選択し、パブリックコンサルタントに就職した時も橋梁構造課に配属していただき、現在も変わりません。入社3年目の平成6年北海道東方沖地震では、町役場の地震災害復旧業務の担当者となり奮闘した経験がとても印象に残っています。災害に至った構造物は、木橋・積ブロック護岸・控え式鋼矢板護岸・防潮堤と多岐に渡り、港湾基準や昭和35年チリ津波沖地震津波を一から学ぶ必要がありました。一人前でない私は、上司や協力会社の方々に協力を得て災害復旧の設計を行いました。成果が完成したのは災害査定の前夜です。一人で寝台車に乗りレンタカーで移動し、午前中に発注者へ説明、午後には災害査定官へ説明し災害復旧の方針が決まっていきました。技術力不足は明らかでしたが、自分で悩み設計計画を行っていたため、関係者へ説明できたことが懐かしく思います。

技術士資格は50歳を過ぎた昨年で、やっと合格できました。資格取得を諦めずにコツコツと学習を続けて良かったと思います。今後の部下への指導には自身の経験や失敗談を取り入れ、資格取得にもチャレンジする技術者に育成できればと考えています。私自身は、BIM/CIM等の新技術習得にチャレンジし、今後も通用する技術者であるための努力に取り組んでいきたいと思っています。

大森 孝行 (おおもり たかゆき)

●建設部門 (鋼構造及びコンクリート)

勤務先

パブリックコンサルタント株式会社



→次号は、山下卓也さん(水産部門)

私は大野町(現北斗市)出身で、平成元年に札幌の建設コンサルタントに入社しました。配属は鋼道路橋の設計部署です。

図面はCADでは無く、ドラフターと三角定規を使いシャープペンシルで作成していました。先輩から『線は細く・強く・均一に』描くよう指導されました。最初はなかなか良い線が描けず、描いては消してを繰り返し、図面が真っ黒になってしまったものです。それでも繰り返し描くことで、まあまあ上手になりました。

当時の建設コンサルタントは今とはちょっと雰囲気や違っていたような気がします。ちょうど『設計屋』から『コンサルタント』への変革期だったように思います。自分がそのような環境の中で技術者人生をスタートできたのは、本当に恵まれていたなと思います。線の描き方を覚え、設計のイロハを身につけつつ、コンサルタントに求められる役割の変化を感じながら成長することが出来ました。

そんな中、2006年(平成18年)に技術士を取得しました。技術士を持っておられる方なら皆さんそうだと思いますが、私にとっても大きな出来事でした。合格したことは勿論ですが、その過程が今の私の宝物となっています。自分ではこれでいいだろうと思っていた答案も、先輩技術士から何度もダメ出しをくらい、心が折れそうになったこともありましたが、でもそれを何度も繰り返すと出来上がった答案は見違えるほど良いものになりました。その後常に意識させられるのは『要点を限られた文字数で分かりやすくしっかりと伝える文章が書けているか』です。

今この文章は皆様にしっかりと伝わっておりますでしょうか……。

山本 和敏 (やまもと かずとし)

●建設部門 (鋼構造及びコンクリート)

勤務先

株式会社 ズコーシャ 技術部



→次号は、川村幸司さん(建設部門)